

1 田代の歴史・文化

(1) 田代地区の概要

田代地区は国道1号バイパス向谷インターから北へ3kmほどに位置し、2000年当時の地形図をみると、低地の標高は140mから180m、周囲を高さ250mから300mの山々に囲まれ、伊太谷川の蛇行によって形成された盆地状のわずかな平野部に大塚姓を中心とした住宅が5～6軒山裾に分布していた様子が伺えます。

埋め立て工事前の田代地区は、周囲に山が迫る小規模な盆地地形を呈するため、風が弱く空中湿度が高いという条件などから独特の湿性環境を呈しており、低地平坦部では伊太谷川の源頭部となる五本の沢が流れ込む小河川を中心に集落が成立してきたとみられます。

「田代」という言葉はもともと水田を意味するもので、山間部の小さな盆地に名付けられる場合が多く全国に見られる地名です。民俗学者の柳田国男は「田代は田の代、すなわち、水田候補地という意味」「山中では田代の地が非常に肝要であったために、自然地名となって今日に残っている（山民の生活）」と述べています。

戦前までは11戸の集落があったようですが、戦後には5戸、3戸と減少していき、1996年から新東名高速道路工事に伴う発生土の埋め立て工事のために全戸移転となりました。現在は島田市の田代の郷整備事業に基づき、島田市田代環境プラザ（2006年）、田代の郷温泉伊太和里の湯（2009年）、ソーラーパークしまだ（2014年）、島田市営伊太霊園（2016年）、島田ゆめ・みらいパーク（2020年）が相次いで建設され、伊太地区だけでなく市民すべての生活にとって大事な地区となっています。



写真 1.1 田代地区、工事前、盆地部から北方向を望む 1996.9.24

(2) 田代地区の歴史

北部には、天台宗の古刹千葉山智満寺があり、集落の北側山裾には参道である伊太丁仏参道の入口があります。そこには若宮八幡神社があり『志太地区神社誌』によれば、創立年月日は不詳、旧家の伝承では戦国時代川越の役に敗れてこの地に逃げ込んだ人々が地の神として勧請、天文15年(1546)社殿を改築し氏神とし、大正五年に本殿を改築したと記されています。

南の高台には曹洞宗玉雲寺があったと伝わります。玉雲寺は現在、1 kmほど南側に移転していますが、寺院跡と伝わる平地は地区の火葬場があったといわれ、石仏や墓標などが見られました。墓標には年号が刻まれ、寛文・延宝・文化・文政・天明・弘化と江戸時代前期から幕末までの墓標を辿ることができます。また、組合せ五輪塔や一石五輪塔、宝篋印塔などがみられ、15世紀から16世紀の戦国時代までさかのぼる石塔があります。

歴史書によると『掛川誌稿』には「(前略)上伊太の奥を田代といい(後略)」、また『駿河記(文化十五年)』では「八王子前より入ることおよそ一里ばかり、八倉の麓にある。佳い石が多い。信濃より石匠が来て、仏像、石塔の類を作り出す」「(前略)北に入って、田代より山路を過ぎて千葉山に至る。」との記述があることから、中世以降にはすでに伊太に田代という集落があり、のちの伊太丁仏参道と思われる参道は認知されていたようです。

同じく『掛川誌稿』では、玉雲寺墓地手前にある法恩寺跡地についてこのような記述があります。「指月山報恩寺 上伊太ニアリ、慶長御朱印五石、本堂五間、本尊地藏、相傳、東照宮千葉山御参詣ノ節、此寺ニ憩セ給フ時ニ、住寺ノ僧御茶ヲ献ス、因テ釜ト茶碗ヲ賜ル、後寺焼テ其器今無シ、現住斧山、」。東照宮は徳川家康のことです。家康が千葉山参拝のときに法恩寺により、僧からお茶をいただいた。これをきっかけに茶釜と茶碗を家康からいただいたが、今は焼けて無いということになります。言い伝えではありますが、上伊太から田代へ北上し、丁仏参道に入るのが千葉山智満寺の重要なルートだったことが想像されます。大塚家の墓標をみると、伊豆石が使われた大変立派なものです。田代の人々は、参道を守る使命があったことが考えられます。



写真 1.2 若宮八幡宮神社跡と丁仏参道沿いの石仏

(3) 田代地区の文化とくらし

田代地区には「とうろんば」があったことが伝えられています。「とうろんば」は、詳しいことは不明ですが仏事（八月の盆行事）」として精霊を招く迎え火を焚いた場所として伝えられています。伊太地域の他の地区と同様、その燃えさかる火を持ち帰り八月のあいだ各家の門口で燃やし続けたと言われています。ただ、同じく「とうろんば」のあった相賀地域や伊久美地域では広場に掲げた高燈籠に火を投げ込んでお盆の送り火としていたとされていますが、伊太地区にはそうしたやり方は記録には残っていません。

田代地区の「とうろんば」は現在の田代環境プラザのある場所とみられていますが、すでに埋め立てられ、その詳しい場所を特定することも困難です。しかし、同じ伊太地域でも上伊太地区や東川根地区にも「とうろんば」があったことが伝えられており、周辺との関連性が垣間見られます。

田代地区の氏神様は先にも述べた若宮八幡宮でした。新東名高速道路工事に伴い田代地区全体が移転されたため、現在は境内跡と鳥居だけが田代地区の移転記念碑とともに残っているだけです。この鳥居も、もとの場所から境内跡に移転する際に足を切ったらしく、くぐることはできません。また、神社付近にはサカキの大木があり、住民から神樹として親しまれていましたが、この樹も現在は丁仏参道の入口に移植されています。

田代地区の人々は千葉山へ向かう参道を維持してきたとともに、平坦地では稲作を中心とした農作業を営んできたと思われれます。ただ、地形の特徴から水田として利用可能な面積は少ないため、稲作以外にも作物をそだてていたと思われれます。田代地区に関する租税台帳の記録などは見つかっておりませんが、埋立地の脇に和紙の原料として各地で栽培されていたミツマタの畑の跡と思われる場所や、明治時代以降に日本に導入され、防水用の油を採取していたオオアブラギリ（シナアブラギリ）が野生化して田代地区内や伊太谷川河川敷に自生している場所が現在でも確認されることから、かつては紙や油の生産にも取り組んでいたことが伺えます。

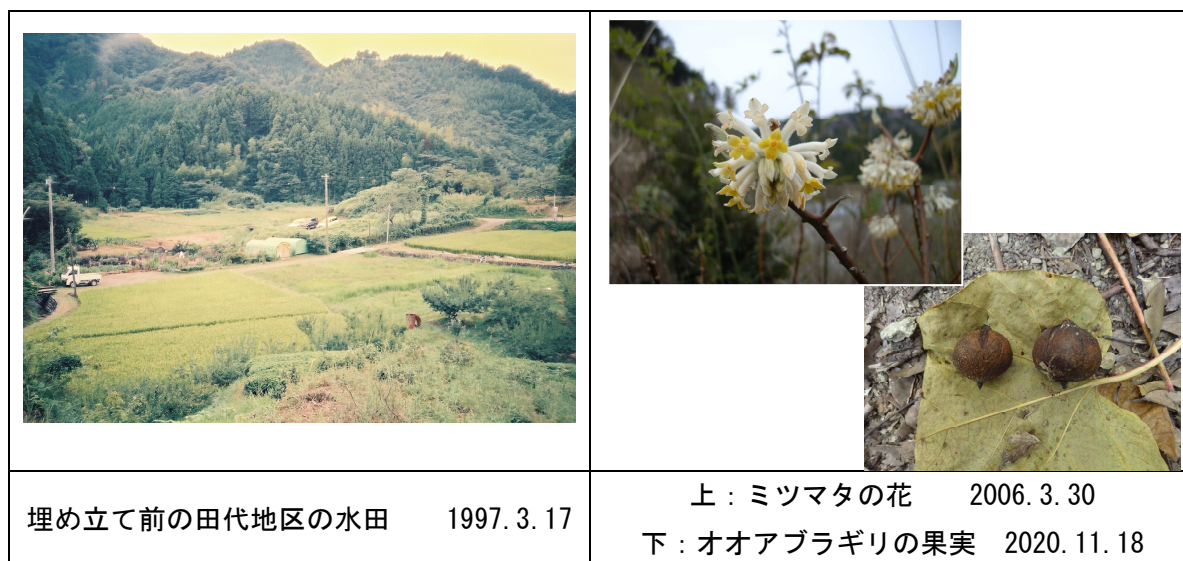


写真 1.3 埋め立て前の田代地区の水田、ミツマタの花とオオアブラギリの果実